

芝居ができるまで

——「銀河鉄道じゃない夜」の場合——

とう うら
東 浦 弘 樹

きわめて私的なことで恐縮だが、筆者は 2012 年 4 月から翌 13 年 3 月まで兵庫県立ピッコロ演劇学校本科⁽¹⁾30 期生として演劇を学び、2012 年 10 月 27・28 日にピッコロシアター中ホールで行なわれた中間発表会 **Piccolo Passo** (小さな一歩) と 2013 年 3 月 9・10 日に同シアター大ホールで行なわれた卒業公演に役者として出演したほか、中間発表会で上演された 6 本の小品⁽²⁾のうちの一作「銀河鉄道じゃない夜」の台本を執筆、卒業公演で上演された「この空の下で」の台本の作成にも「台本委員会」のメンバーとして参加した。

本論文では、筆者が中間発表会のために書いた小品「銀河鉄道の夜」をとりあげ、この戯曲がどのように書かれ、どのように上演されたかを書き留めたい。無論、筆者はフランス文学の研究者であってプロの劇作家ではないし、上演したのもプロの劇団ではない。そのような人間が自らの書いた戯曲について語っても、学術的価値は皆無と言わざるをえないであろう。また、この芝居は演劇学校の中間発表という特殊な条件のもとで書かれたものであり、筆者の体

(1) ピッコロ演劇学校本科は 1983 年に創立された全国初の公立演劇学校であり、演劇学校研究科および舞台技術学校が併設されている。詳しくは <http://hyogo-arts.or.jp/piccolo/school/> を参照されたい。

(2) 上演された 6 作品のタイトル・作・演出・上演順は次の通りである。

- ①「月明かりの下の鎖骨」作・演出：岡野洋平
- ②「待合室」作：柿本健生，演出：塩谷命
- ③「嘘の伝道師」作・演出：福本紗希
- ④「ドリーム・ジャーニー」作：石田みちる，原案：溝口智哉，演出：谷井恵
- ⑤「ホテルハバナにて」作・演出：橘明日香
- ⑥「銀河鉄道じゃない夜」作：東浦弘樹，演出：川畑行史，増田杏菜

験が一般性・普遍性をもつものとはとても思えない。

とはいえ、文学研究者が劇作家・役者として舞台を経験することは稀であり、実際に芝居の上演に携わっている演劇人が芝居の制作過程について語ることが少ないのであれば、筆者のような人間が自らの体験を語り、文学研究と芝居の現場の接点を探ることは決して無益ではないように思える。

われわれ文学研究者はほとんどの場合、戯曲を完成された「作品」として読む。しかし、実際の上演にあたっては、戯曲は材料でしかなく、戯曲を読むだけではとても想像できないようなことが演出の過程で付け加えられることも少なくない。場合によっては戯曲に修正が加えられることさえある。そのような現場の雰囲気や息づかいの一端なりともここに書き留めることができれば筆者としてはこのうえない幸いである。

Piccolo Passo は本科の学生 38 名を 6 つのグループに分け、オムニバス形式で 6 本の小品を上演した。それぞれの台本の執筆および演出は本科生が担当し、それを本科の主任講師である本田千恵子氏が監修・指導するという形をとった。さらに 6 本の小品にある統一性を持たせるために、次のような条件が課された。

- 1) 「囚われた場所」を共通のテーマとする。
- 2) 共通のワードとして「誕生」, 「鎖骨」, 「光」, 「嘘」, 「カーブ」, 「あの人」, 「爪先」, 「黒電話」, 「バナナ」, 「ビー玉」の 10 語を使う⁽³⁾。
- 3) 共通のフレーズとして「普通って何?」, 「みんな繋がっている」, 「だからあの時〇〇を選ぶべきだったんだ」, 「△△次第だよ」, 「10 円玉持ってますか」の 5 つを使う⁽⁴⁾。

(3) これらの 10 語は本科生がそれぞれ 5 語ずつ出したことばから抽選で選んだものである。便宜上「ワード」と書いたが、必ずしも科白の中にそのことばを入れる必要はなく、ものそれ自体を芝居に登場させることも許された。

(4) これらの 5 文はキーワードと同様の方法で選ばれた。「次第だよ」を「次第よ」に、「持ってますか」を「お持ちですか」というように語尾や言い回しを変えるのは自由であった。

4) 上演時間は小品を演じる役者の数×3分とする⁽⁵⁾。

このような条件を課されることは一見窮屈なようであるが、実は想像力を刺激するには有効な手段であり、筆者自身このような条件があったからこそ曲がりなりにも小品を書けたものと思っている。

ではまず「銀河鉄道じゃない夜」の全文を挙げた上で、その詳細について語りたい。

「銀河鉄道じゃない夜」

作：東浦弘樹

演出：川畑行史，増田杏菜

上演指導：本田千恵子（ピッコロ劇団員）

上演指導助手：広瀬綾子（ピッコロ劇団員）

照明プラン・操作：大川貴啓

音響編集：林哲郎

舞台監督：宮田重雄

配役：

若い女（西川恵美）

カップルの男（村上美由希）

カップルの女（増田杏菜）

セクシーな女（柿崎祥子）

主婦ふうの女（平野友子）

謎の男（大森康至）

中年の男（東浦弘樹）

車掌（川畑行史）

(5) 「銀河鉄道じゃない夜」の場合、役者は8人なので、上演時間として24分が与えられた。

場所：電車の車内

暗闇の中，列車の走る音。急停車の音。明転。

カップルの女	きゃっ。
カップルの男	大丈夫，けがはない？
若い女	何があったの？
セクシーな女	事故かしら？
主婦ふうの女	息が苦しいわ。
カップルの女	出られないの？
謎の男	ドアがあかない。
主婦ふうの女	窓もだめだわ。
カップルの男	閉じ込められたみたいですね。
セクシーな女	いやよ，こんなところ。

車掌，登場。

車 掌	お急ぎのところ申し訳ありません。人身事故で一時停車しております。
謎の男	ドアをあけてくれないか。ここから先は歩いて行く。
車 掌	それはできません。危険です。
主婦ふうの女	じゃあ出られないの？
若い女	(携帯電話をさわって) 圏外だわ。

前の車両から中年の男が登場。謎の男に近づく。

カップルの男	きっと飛び込み自殺だな。
若い女	そうなの？

謎の男 (中年の男に) おれの後ろに立つんじゃない。

中年の男, 謎の男のそばを離れて席につく。

セクシーな女 どうせリストラにあったおじさんか何かじゃないの。お金もない, 仕事もない, 家族からも相手にされない。で, 何もかもいやになって, 線路にジャンプ……

カップルの女 はた迷惑な話ですね。

中年の男 知りもしないくせに……

カップルの男 え? 何ですか?

中年の男 知りもしないくせにって言ったんだ。

カップルの女 あなたの話をしてるんじゃないやありません。列車に飛び込んだ人の話をしてるんです。

中年の男 おんなじことだ。勝手なことを言いやがって。お前ら, おれがいくつに見える?

若い女 五十五。

セクシーな女 五十七。

主婦ふうの女 五十九。

カップルの女 六十一。

中年の男 多めに言わなくていい。五十三だ, 五十三。この歳になると同期はたいてい部長か課長だ。ところがおれはいまだに係長補佐。上司の係長なんか, おれより一回りも下だぞ。そんな上司のもとで働くのがどんな気持ちか……

若い女 かわいそう。

セクシーな女 いやな上司なのね。

中年の男 それがいい奴なんだ。なにかと気を使ってくれて, 呼ぶときも田所さんって, 「さん」づけだ。やさしい奴なんだよ。でもな, やさしさがひとを傷つけるってこともあるからな。だ

から、おれはこんなのやってられるかって辞表をたたきつけてやった。クビじゃない。自分からやめてやったんだ。ところが、昨日、ふだんはめったに口をきいてくれない娘が、折り入って話があると言いやがった。

男の娘(若い女) お父さん、お願いがあるんだけど。

中年の男 うん？　なんだ？

男の娘(若い女) こんど友だちとスキーに行きたいの。

中年の男 スキーか、お父さんも若い頃はよく行ったもんだ。

男の娘(若い女) でね、ちょっとおこずかいが足りなくて。

中年の男 いくらいるんだ？

男の娘(若い女) 五万……って言いたいけど、三万でいいわ。

中年の男 わ、わかった。いまは持ち合わせがないから、明日 ATM でおろしてくるよ。……田所秀一郎、五十三歳、娘に嘘をついてしまいました。ATM に行っても、私の口座はからっぽ……三万円なんてどこにもありゃしません。毎日毎日、働きづめに働いて、かわいい娘のために三万円ぼっち出せないなんて……私は一体何のために働いてきたのか。私の人生はなんだったのか……（カップルの男女に）あんたらみたいにへらへら生きているカップルにこんな気持ちがわかるのか。

カップルの女 私たち、へらへらなんかしてません。

カップルの男 ひとみさん、よろししょう。

カップルの女 いいえ、薫さん、言わせて頂戴。

中年の男 面白いじゃないか、言ってみろ。

カップルの男 わかりました。では僕から話しましょう。僕は働きながら帝大に通う学生です。

中年の男 いつの時代の人間だ。

若い女 帝大って何？

セクシーな女 帝京大学じゃない。

車 掌 ちがいます。

カップルの男 その日も僕はコンビニエンスストアでアルバイトをしていました。そこで僕は地上に舞い降りた天使に出会ったのです。

カップルの女 私は大企業の社長の娘。蝶よ花よとなに不自由なく育てられました。でも、ほんとに悲しい籠の鳥。自由なんてまったくありません。ある日、大使館のパーティーに行く途中、私は不思議なお店を見つけました。看板に七と十一という謎の数字が書いてあるんです。

主婦ふうの女 それセブンイレブンじゃないの。

カップルの女 そこで私は白馬に乗った王子さまに出会ったのです。

カップルの男 いらっしゃいませ……お弁当あたためましょうか……十円玉はお持ちでしょうか……ありがとうございます……二百円のお返しです。

カップルの男・女 (たがいに目が合う) あっ！

カップルの女, 男に近づく。ふたりの指先が触れる。

(I)

カップルの女 あの……そこにある丸くて白いものは何でしょうか？

カップルの男 これは……肉まんですが。

カップルの女 まあ、やさしいのね。

カップルの男 え？

カップルの女 罪を憎んで、ひとを肉まん……なんちゃって。

若い女 えーっ？ 駄洒落？

女の運転手
(謎の男) (腕時計を見ながら) お嬢さま、そろそろおいでになりますと。

カップルの女 (運転手に) 高橋、ちょっと待って。(紙に何かを書き付けて、それを男に渡しながら) これ、私の電話番号です。電話

してください。(ダイヤルを回すしぐさ)
カップルの男 (同じくダイヤルを回すしぐさをしながら) 必ず電話します。
セクシーな女 ダイヤル式なの?
車 掌 黒電話なんですね。
中年の男 いつの時代の人間だ。
カップルの男 こうして僕たちふたりは恋におちました。
カップルの女 そのときの肉まん、ふたつに割ってしまでも記念にもってる
んです。(ふたりは肉まんをとりだし、ぴったり合わせる)
ほら、ぴったり合うでしょう。
セクシーな女 当たり前よ。
主婦ふうの女 もう腐ってるんじゃないの。
若い女 勘合符貿易みたい。
中年の男 (しらけて) ねえ、タバコすってもいいかな?
車 掌 車内は禁煙です。
カップルの男 しかし、幸せなときは長くは続きませんでした。
セクシーな女 どうして?
カップルの男 それは……(帽子をとると、長い髪がはらり)
若い女 え? なに? 女?
主婦ふうの女 レズビアンなの?
セクシーな女 普通じゃないわ。
カップルの女 普通って何?
カップルの男 愛に性別は関係ありません。人間と人間が愛し合っているだけ
です。
中年の男 ちょっと失礼。

中年の男、カップルの男——実は女——の胸を触ろ
うとする。

カップルの男、中年の男にびんた。

車 掌 胸は触らない。
中年の男 たしかめようとしただけなのに。
カップルの女 周囲は私たちの仲をゆるしてくれませんでした。だから私たち……（Ⅱ）
カップルの男 だから僕たち、手に手をとって逃げてきたんです。
若い女 かわいそう。そんなことがあったのね。
セクシーな女 かわいそうと言うべきか、 なんとと言うべきか。
中年男 （しらけてエロ雑誌をみている） はいはい、 そうですか。 あーっ！ ちょっとこれ……

謎の男にエロ雑誌を見せようとする。

謎の男 おれの後ろにたつんじゃない。
中年男 なんだよ。お前はゴルゴ 13 か。（他の乗客に） ほら、 これ見てくれよ。ここで足開いてる女、 あいつじゃないか？（セクシーな女を指す）
若い女 きゃっ、 エッチ。
カップルの女 こんな雑誌読んでるんですか？
中年の男 いや、 そこじゃなくて。
セクシーな女 ちがいます。私じゃありません。
カップルの男 でもうりふたつですよ。
主婦ふうの女 ほんと、 そっくり。
セクシーな女 ちがいます。私は……こう見えても、 私はグラビアアイドルです。まだそれほど売れっ子ってわけじゃないけど。でも、 もうじきブレイクします。
中年の男 あやしいもんだ。
セクシーな女 高校の頃から、 私はクラスの人気者でした。
同級生 1 ねえ、 まゆみ、 あなたタレントになったら？
（若い女）

同級生 2
(カップルの女)

ほんと、まゆみならなれるわよ。

セクシーな女

なれるかしら。

同級生 1
(若い女)

それはあなた次第よ。

セクシーな女

そのことばを信じて、私は都会に出ることにしました。スター誕生を夢見て。

女のおばあちゃん
(主婦ふうの女)

まゆみ、どうしても都会に行くのかい？

セクシーな女

ええ、もう決めたの、おばあちゃん。

女のおばあちゃん
(主婦ふうの女)

じゃあ、これを持ってお行き。(セクシーな女にお守りを渡す)

セクシーな女

なにこれ？ お守り？……中に何か入ってる。……ビー玉？

女のおばあちゃん
(主婦ふうの女)

光にすかして見てごらん。きれいじゃろう。

セクシーな女

(ビー玉を光にすかして見る)ほんと、きれい。

女のおばあちゃん
(主婦ふうの女)

都会はこわいところじゃ。つらくなったらこれを見るがいい。

セクシーな女

おばあちゃん、ありがとう。私がんばる。……こうして私は都会に出て来ました。タレントスクールに入って、ボイストレーニングに通って……でも、都会の風は冷たかった。仕事なんてほとんどまわってきません。……でも、あの人だけはちがった。あの人だけはやさしかった。私のことを褒めてくれたんです。

カメラマン
(謎の男)

(写真をとりながら)君、いいね、とってもいい。とくに鎖骨がすばらしいよ。

カップルの男

鎖骨？

カップルの女

その趣味はわからないわ。

カメラマン
(謎の男)

こんど知り合いのプロデューサーを紹介するよ。

- セクシーな女 ほんと？ 約束よ。
- カメラマン
(謎の男) ああ、約束だ。(ふたりは指切りをする)
- セクシーな女 私はあのひとを信じました。でも……
- カメラマン
(謎の男) (やくざっぽい男(中年の男)に) あれが例の女です。
- やくざっぽい男
(中年の男) なかなかよさそうなタマやな。ごくろうさん。(カメラマン
にお金を渡す) ほら、とつとき。
- カメラマン
(謎の男) まゆみちゃん、このひとがこないだ話したプロデューサー
……じゃあ、僕はこれで。
- セクシーな女 あ、ちょっと待って。
- やくざっぽい男
(中年の男) まあまあ、ええなないか。心配することあらへん。悪いよう
にはせんさかい。
- セクシーな女 やめてください(男の手を振り払い、びんた)。
- 中年の男 えー、また？
- セクシーな女 こうして私の転落が始まりました。好きでもない男の相手をして
したり、恥ずかしい写真をとられたり……(ビー玉をとりだ
してながめる) とってもきれい……おばあちゃん、ごめんな
さい。
- カップルの女 田舎に帰ればいいのに。
- セクシーな女 帰れるもんですか。みんなの期待を背負って出て来たのに、
どのつらさげて帰れって言うの。私にはもう故郷なんてあり
はしない。あるのはただこのちっぽけなビー玉だけ……
- 主婦ふうの女 (セクシーな女を抱いて) もういい、わかったわ。かわいそ
うに。ひどい目にあったのね。

主婦ふうの女、セクシーな女を席の方へ連れて行こ
うとする。

中年男、缶ビールのプルトップをあける。主婦ふう

の女、はたと立ち止まる。

車 掌 ビールは飲まない。
中年男 ちっ、また怒られちゃった。
主婦ふうの女 あの……そのビール、飲まないならいただけますか。
中年男 え？ いいけど……
車 掌 あ、おやめになった方が……

主婦ふうの女、ビールをとろうとする。手がふるえている。

若い女 やだ、アル中みたい。

主婦ふうの女、ぎくりとする。

若い女 え？ほんとにアル中なの？
主婦ふうの女 ちがいます。……私も若い頃はミュージカルスターを夢みていました。ちょい役だけど、舞台にたったこともあるんです。(踊る)(Ⅲ)でも、その頃付き合っていた人が、ある日突然……

主婦ふうの女
の恋人(車掌) (指輪のケースを差し出して)友子さん、僕と結婚してもらえませんか。

主婦ふうの女 (ケースをひらいて)はい、よろこんで。

セクシーな女 どこかの居酒屋みたい。

カップルの女 いい話じゃない。

主婦ふうの女
の恋人(車掌) お願いがあるんだ。君にはずっと家にいて欲しい。だから……仕事をやめてくれないか。

カップルの男 勝手なやつだ。

カップルの女 女を何だと思ってるのかしら。
主婦ふうの女 私は迷いました。あの人のことは好き。でも、夢は捨てられない。
主婦ふうの女
の恋人(車掌) 友子、愛してるよ。(ふたり、抱き合う)
若い女 (車掌に) あの、こんなときなんですけど、お手洗いは？
カップルの女 え？ いま？
カップルの男 いいじゃないか。しかたないよ。
車 掌 (主婦ふうの女を抱きしめながら) 前の車両にあります。
若い女 ごめんなさい。

若い女、退場。

主婦ふうの女 (男から離れて) 結局私は、あの人のために夢を捨てました。
……私たちは幸せになるはずでした。でも……
主婦ふうの女
の恋人(車掌) ただいま。(女の頬にキスをする)
主婦ふうの女 おかえりなさい。お食事になさいますか。
主婦ふうの女
の恋人(車掌) ああ、そうしよう。……うん？ みそ汁がさめてるね。
主婦ふうの女 ごめんなさい。すぐにあたためます。
主婦ふうの女
の恋人(車掌) みそ汁がさめてるね。
主婦ふうの女 ごめんなさい。
主婦ふうの女
の恋人(車掌) 仕事で疲れて帰ってきたのに、みそ汁がさめてるね。
主婦ふうの女 あなた、やめて。

男、テーブルをひっくり返し、倒れた女に殴る蹴るの乱暴。

主婦ふうの女の恋人(車掌) どうしてみそ汁がさめてるんだあつ。

主婦ふうの女 ごめんなさい、ごめんなさい。

主婦ふうの女の恋人(車掌) もういい。今日は外で食べる。(出て行きながら、振り返って) 友子、愛してるよ。

カップルの女 ひどい。

セクシーな女 コスメティックバイオレンスね。

カップルの男 ドメスティックバイオレンスです。

主婦ふうの女 こんな日が毎日つづきました。お酒でも飲まなきゃ、やってられません。お酒を飲んだときだけ、心が落ち着くんです。(その場に座り込んで、酒を飲む) 最初はほんの少しでした。でもそのうち1杯が2杯、2杯が4杯、4杯が8杯、お酒の量は増えていきました。

カップルの男 等比数列ですね。

カップルの女 だからあのとき夢を選ぶべきだったのよ。

主婦ふうの女 気がつくと、私はもうもとは戻れない身体になっていました。手も足も腰も、もうがたがた。昔はあんなに踊れたのに……

カップルの女 お気の毒に。

中年の男 (話を全く聞いていない。鞆からバナナを取り出し一口かじって、謎の男に) いやあ、心温まるいい話だねえ。にいちやん、あんたも食べてみなよ。

謎の男 おれの後ろに立つんじゃない。

中年の男 いいじゃないか。食べてみなって。

謎の男 おれの後ろに立つなと言ってるだろう。

コートからライフルをとりだし、全員に向ける。一同騒然。

車 掌 みなさん、落ち着いて。こういうときは刺激しちゃだめです。(謎の男に) 要求は何だ。要求を言え。

謎の男 要求？ 要求は……ない。僕はただこの状況を楽しんでいるだけだ。ホレ (銃口を乗客のひとりに向ける)。ホレ、撃つぞ。こっちは死ぬことなんかちっとも怖くないんだ。……銃口を向けるだけで、愚かな人間どもの顔に恐怖の色が浮かぶ。やつらが生きるも死ぬも僕次第。まるで自分が神にでもなったような気持ちだ。そうとも、いまこの瞬間、僕は生きている。

トイレから戻ってきた若い女、謎の男の肩をトントンとたたき、振り返ったところに軽くびんた⁽⁶⁾。
謎の男ふっとぶ。

カップルの女 あ、弱い。

謎の男 (情けなく) だから後ろに立つなと言ったのに。

セクシーな女 後ろに立たれると弱いてことだったのね。

カップルの男 これ、モデルガンですね。

謎の男 返せ (ライフルを取り返す)。これは僕の宝物なんだ。(ライフルをなでながら) ほら、かっこいいだろ。このカーブがたまらない。

カップルの女 その趣味はわからないわ。

謎の男 みんなそうなんだ。親も先生も友だちも、誰も僕の趣味を理解してくれない。だから、僕は学校をやめた。

若い女 引きこもりなのね。

男の母親
(カップルの女) 達也、どうして学校に行かないの？

(6) 台本上は「びんた」となっているが、実際の上演では後ろから突き飛ばした。

謎の男、一心にライフルを磨いている。

男の母親
(カップルの女)

お願いだから、学校だけは行って頂戴。……お前は将来何になりたいの？

謎の男、答えない。

男の母親
(カップルの女)

一体将来何になるつもりなの？

謎の男

(ぼつりと) 僕は……ゴルゴ 13 になるんだ。

男の母親
(カップルの女)

え？

謎の男

(怒鳴る) 僕はゴルゴ 13 になるんだ。

男の父親
(カップルの男)

達也、お前はやればできる子だ。がんばれば医者にだって弁護士にだって政治家にだってなれる。でもなあ、達也、ゴルゴ 13 にはなれないんだよ。あれは漫画の主人公だから……

謎の男

なれるさ。父さんも母さんも出て行ってくれ。僕はゴルゴ 13 になるんだ。(銃を改造しながら) このモデルガンを改造して本物の弾丸^{たま}が出るようになれば、僕はやつらを見返してやれるんだ。

セクシーな女

やつらって誰？

謎の男

やつらはやつらさ。僕を理解しようともせず馬鹿にしたやつら全員さ。(改造を続ける) 本物の弾丸さえ出れば、本物の弾丸さえ出るようになれば……

銃声。

若い女

きゃーっ。

主婦ふうの女

何があったの？

セクシーな女 暴発？
中年の男 (意に介さず) さあ、それじゃあ次いこうか。次は……(若い女に) お嬢さん、あなただ。
若い女 え？ 私？
中年の男 そうとも。あとはあんたしかいない。
カップルの女 あなたも何かあるでしょう？
若い女 いいえ、別に。
カップルの男 そんなはずはないでしょう。
中年の男 お父さんがリストラされたとか。
カップルの女 禁断の恋に悩んでいるとか。
セクシーな女 悪い男にだまされたとか。
主婦ふうの女 DV を受けてるとか。
謎の男 誰からも理解してもらえないとか。
カップルの男 何かあるはずです。思い出してごらんなさい。みんな繋がってるんですから。
若い女 あっ、そういえば、今朝……
乗客全員 今朝？
若い女 出がけに箆笥に爪先をぶつけました。
乗客全員 そういうことではなくて。
若い女 そう言いますけど、あれ痛いんですよ。
セクシーな女 他にもあるでしょう。
若い女 そのあと、大学に行って……
カップルの女 同級生にいじめられた。
若い女 いいえ、とってもいい友だちです。
謎の男 教授にセクハラされた。
若い女 いいえ、立派な先生です。
カップルの男 じゃあ、恋人は？
若い女 います。すてきな人です。

主婦ふうの女 でも暴力をふるう。
若い女 ふるいません。
カップルの男 じゃあ、何も不幸なことはないってことですか？
若い女 ええ、まあ。
乗客全員 つまらない人生。
謎の男 ドラマはないの、ドラマは。
カップルの男 そんな平凡な生活、僕なら耐えられない。
カップルの女 私たち不幸でよかったわね。
主婦ふうの女 不幸なことがなにひとつないなんて……
乗客全員 それこそ最大の不幸だね。
若い女 (叫ぶ) いや、もうやめて。
車 掌 みなさま長らくお待たせしました。処理が終わりましたので、まもなく発車します。席にお戻りください。

全員もとの席に戻る。電車の音。まもなく駅に到着。

車 掌 ご乗車ありがとうございました。あまつくに（「玉造」のアクセントで）、あまつくに。終点です。
中年の男 なにひとつ不幸なことがないという不幸なお嬢さん、何かの役に立つかもしれない、これを差し上げよう（食べさしのバナナを渡して降りていく）。じゃあ、お元気で。
カップルの男 僕たちはこれを（肉まんを若い女に渡す）。
カップルの女 もう腐ってるかもしれないけど（同じく肉まんを渡す）。
セクシーな女 これ、あなたが持ってて（ビー玉を若い女に渡す）。
主婦ふうの女 私はこちら。（指輪のケースを若い女に渡す）大事にしてね。

謎の男、だまってモデルガンを若い女に渡す。

若い女 大切なものじゃないんですか？
謎の男 いいんです。どうせもってはいけないから。

全員降りて行く。

若い女 待って。私も降ります。
車 掌 あなたは降りられません。
若い女 どうしてですか。ここ玉造でしょう？
車 掌 あなたはまだこの列車がどういうものかわからないのですか。ここは玉造でも、喜連瓜破きれうりわりでも、雲雀丘花屋敷ひばりがおかはなやしきでもありません⁽⁷⁾。あまつくに、天あまつ国……つまり天てんの国です。この列車は死者をあの世に連れて行く列車なんです。

若い女 死者をあの世に？⁽⁸⁾
車 掌 はい……さきほどまで乗っていたのはみなさん亡くなった方です。河本薫さんと豪徳寺ひとみさんのカップルは将来に絶望して心中。自称グラビアアイドルの木下まゆみさんは麻薬に溺れて中毒死。主婦の宮本友子さんはアルコール依存症で衰弱死。ガンマニアの本城達也さんは銃の暴発で事故死。会社をやめた田所秀一郎さんは……あの人は変わってますね。よりによってこの列車に飛び込んで自殺するなんて。私も長いこと車掌をしています、こんなことははじめてです。

若い女 じゃあ、私も死んだの？
車 掌 今日のこと、覚えてないんですか？
若い女 今日は……朝、出がけに箆へらに爪先を……

(7) 「玉造」という駅名を選んだのは、「天つ国」と音が似ているという理由からにすぎず、特に意味はない。「喜連瓜破」，「雲雀丘花屋敷」は実際に存在する駅名。変わった駅名として関西では有名である。

(8) 初稿ではここに「若い女：銀河鉄道スリーナインなの？／車掌：スリーナインは余計ですけど」という科白があったが、緊迫感を維持するために差し替えた。

車 掌 そのくだりはもういいです。
若い女 大学で授業を受けて……それからバイトに行って……それから……

車 掌 それからどうしました？
若い女 変ね、思い出せない。
車 掌 あなたは午後八時二十三分、バイト先のタリーズコーヒーから帰る途中、玉造の自宅近くの路上で無免許運転のバイクにはねられました。すぐに救急車で玉造市立病院に搬送されましたが、頭を強く打って、意識不明の重体、午後十一時十七分に心肺機能が停止しました。

若い女 死んだってこと？
車 掌 ふつうはね。でも、あなたは奇跡的に助かりました。だから、地上に帰るんです。

若い女 ……
車 掌 この列車はこれより折り返し運転に入ります。このまま戻って、あなたには生き続けていただきます。

若い女 ……いいんですか？
車 掌 あなたにはまだ長い人生がある。どうせ平凡なつまらない人生でしょうが。

車掌、指をならそうとする。

若い女 (確かめるように) 私の人生……大学へ行って、バイトをして、ときどき恋人と会うだけの人生。友だちとカラオケに行き朝まで歌うのが私の最大の冒険。平穏なだけで何のドラマもないつまらない人生。……でも、夕暮れに風に吹かれて胸がきゅっとなるあの感じ、唐揚げを食べて口のまわりがべたべたになるあの感触、おつりにギザギザの入った十円玉を

もらったときのあの小さな喜び……いまの私にはそんなことがたまらなくなつかしい。(車掌に) ……あの人たちの人生に比べたら平凡な人生かもしれません。でも私……生きていようと思います。

車 掌 ……まあ、そんな人生も、ないよりはましでしょう。

車掌、指をぱちんと鳴らし、若い女の目を閉じる。

車 掌 さあ、眠りなさい。目が覚める頃には地上に戻っています。……この列車はこれより折り返し運転に入ります。次は地の国、地の国。(観客に) みなさまのなかに人生に疲れた方、将来に絶望して生きる力を失った方がおられましたら、当銀河鉄道をご利用ください。安心・快適をモットーに京阪奈と天つ国を四十五分で結ぶ銀河鉄道は、みなさまのご乗車をお待ちしています。

制服の前を開けると、裏にドクロのマークがプリントしてある。

溶暗。

読んでいただければわかる通り、この芝居は事故で停車した列車内に閉じ込められた7人の乗客がそれぞれの身の上を語るというものであり、役者はほぼ出ずっぱりで、他の乗客の話に茶々を入れるだけでなく、身の上話の中の登場人物を演じることになる。上演にあたっては、列車内で繰り広げられている現在進行中の物語と、ある種の劇中劇とでも言うべきそれぞれの乗客の物語の切り替えを明確に表現することが要求される⁽⁹⁾。それと同時に、他の乗客の

身の上話をどう聞か、目の前で演じられる身の上話に対してどのような態度をとり、どのように反応するかが重要である。

「囚われた場所」というテーマが決まった時点で、筆者の頭には事故で停車中の列車の中で乗客がそれぞれ身の上話をするという設定が浮かんでいた。さらに、その列車は死者をあの世に送る乗り物であるというアイデアが加わり、物語の枠組みはかなり早い段階で決まった。

当初予定していた登場人物は、若い女・カップルの男女・セクシーな女・謎の男・中年の男・車掌の7名であったが、筆者を含め8名の本科生が出演を希望したため、主婦ふうの女を付け加えた。ミュージカル女優をめざしていたが結婚して夢をあきらめたという設定の人物だが、これはこの役を演じた平野友子氏が実際にミュージカルに出演しており、踊りに堪能であるところから考えたものであり、この役だけが所謂「あてがき」である。

カップルをレズビアンにしたのは意外性をねらったというのが主な理由だが、本科は圧倒的に女性が多く、男優を確保するのがむずかしいという物理的な理由からでもある。最終的に筆者を含めて3名の男優が参加したため上のような配役になったが、当初の段階では車掌を女性にすることも考えていた。

初稿の執筆は予想以上に早くすすみ、キーワード・キーセンテンスをどこにどういう形で使うかも比較的すんなりと決まった。個人的にはカップルの男女がダイヤル式の「黒電話」で連絡をとりあうというところは、男が働きながら「帝大」に通っているという設定とうまくマッチしたと自負している。ただ、「帝大」に関しては、十代、二十代の若い役者たちはそれがどういうものかわかっておらず説明が必要であったし、なぜ現代に生きている人物が「帝大」に通っているのか、このカップルは過去からタイムスリップしてきた人間なのか、それともこの列車は時代を超越した乗り物なのかなどの質問を受けることになった。どのように解釈するかは無論自由だが、筆者自身はカップルはわれわれと同じ現代人であり（その証拠にふたりはコンビニエンスストアで出会っ

(9) 照明担当の大川貴啓氏は現在進行中の場面には白い照明を身の上話の場面には黄色がかった照明を使うことで両者の区別を明らかにした。

ている)、そのような人間が「帝大」に通い、「黒電話」を使っているというナンセンスやアナクロニズムに面白さを感じてもらいたいと考えていた。

配役が決まり立ち稽古になった段階で最初に問題になったのが舞台装置をどうするかであった。三方を暗幕で覆ったシンプルな舞台にホワイトボックスを置いて列車の車内を模すというのは最初から決まっていたが、座席をロングシートにするかクロスシートにするかを考えなければならなかったのである。さまざまな試行錯誤ののち、演出の増田杏葉氏の提案により、ホワイトボックス2個を一行として、上手奥から下手前にかけて斜めに5列並べることでクロスシートを3つ作り、上手から数えて最初のクロスシートにセクシーな女と主婦ふうの女、2番目のクロスシートに若い女、3番目のクロスシートにカップルの男女が座り、最初のクロスシートと2番目のクロスシートの間を空けて、そこに列車の扉があるという設定にして、そのそばに謎の男が立つようにした。列車は上手に向かって進んでいるということにして、中年の男は上手奥から登場し、若い女のななめ向かいに座るようにした⁽¹⁰⁾。また、背景の暗幕の中央部に切れ目をつくり、ラスト近くで乗客たちが降車する場面ではそこから退場するようにした。

次に問題となったのは、ビール・バナナ・肉まんなど所謂「消えもの」の扱いである。筆者は本物を使うことを考えていたが、バナナはともかく、ビールはこぼすと収拾がつかないし、肉まんは中身がこぼれ落ちる危険があるということで、演出の増田氏は作り物を使うことを主張し、本番直前まで議論が続いたが、結局肉まんは透明のラップで包み、ビールは車掌がとりあげて舞台袖にもって行くことで決着がついた。

さらに二カ月近い稽古のあいだに様々な理由から初稿にいくつかの修正が加えられた。まずとりあげるべきは、効果音楽をすべて削除したことだろう。初稿では、カップルの男女が出会う場面（Ⅰ）で映画『慕情』のテーマ音楽を、ふたりが駆け落ちしたことを語る場面（Ⅱ）で細川たかしの「矢切の渡し」

(10) 中年の男はこの列車に飛び込んで自殺したのだから、前の車両から登場する必要がある。

を、主婦ふうの女が踊る場面（Ⅲ）でミュージカル『コーラスライン』のオープニングテーマをかけることになっていたが、「音楽をかけると観客はそれに引っ張られる。中年の男やセクシーな女、謎の男のシーンと同じく、芝居で勝負して欲しい」という本田千恵子氏のアドバイスを受けて音楽を削除したのである。その結果、主婦ふうの女は自分でカウントをとって踊ることになり⁽¹¹⁾、少し寂しい場面になった。だが、その寂しさは主婦ふうの女の物語にマッチしたものであったと言えるだろう⁽¹²⁾。『慕情』のテーマや「矢切の渡し」は、「帝大」や「黒電話」とならんでカップルのアナクロニズムを強調する意味で個人的には愛着があったが、芝居の仕上がりをみるかぎり、本田氏の指摘はきわめて的を射たものであったと言えよう。

これにかぎらず本田氏のアドバイスは非常に有益であると同時に、芝居というものが、あるいは役者というものがどうあるべきかについてわれわれの眼を開いてくれた。初稿の修正に関する本田氏の提案のなかで最大のものは、ラストの車掌の科白と若い女の科白の順序の入れ替えであろう。初稿では、「私の人生……」で始まる若い女の独白は車掌のアナウンスの後、すなわちこの芝居の最後に置かれていた。

以下にその箇所を挙げておこう。

車 掌 あなたにはまだ長い人生がある。どうせ平凡なつまらない人生でしょうが、まあ、ないよりはましでしょう。

指をぱちんと鳴らし、若い女の目を閉じる

車 掌 さあ、眠りなさい。目が覚める頃には地上に戻っています。

(11) 効果音楽を削除するかわりに、次のような科白を付け加えた。「中年の男：なんだこりゃ？／若い女：ダンスよ、ダンス。すごい。／カップルの女：すてき。」

(12) 主婦ふうの女の寂しさ・みじめさを強調するために、この役を演じた平野友子氏はダンスの終わりでわざとよろけてみせた。

……この列車はこのまま折り返し運転に入ります。次は地の国、地の国。（観客に）みなさまのなかに人生に疲れた方、将来に絶望して生きる力を失った方がおられましたら、当銀河鉄道株式会社をご利用ください。安心・快適をモットーに京阪奈と天つ国を四十五分で結ぶ銀河鉄道株式会社は、みなさまのご乗車をお待ちしています。

制服の前を開けると、裏にドクロのマークがプリントしてある

若い女 （夢うつつで）私の人生（……）大学へ行って、バイトをして、ときどき恋人と会うだけの人生。友だちとカラオケに行き朝まで歌うのが私の最大の冒険。平穏だけで何のドラマもないつまらない人生。（……）でも、夕暮れに風に吹かれて胸がきゅっとなるあの感じ、唐揚げを食べて口のまわりがべたべたになるあの感触、おつりにギザギザの入った十円玉をもらったときのあの小さな喜び……いまの私にはそんなことがたまになつかしい。（……）私、生きたい。あの人たちの人生に比べたら平凡な人生かもしれないけど、私、もう一度生きてみたいんです。

この戯曲の主人公でもある若い女の生きる決意が芝居の幕を閉じるというのは、ある意味で自然な流れであると言えよう。しかし、本田氏はあえてそれに逆らい、車掌の科白を最後にもってくることを提案した。そのようにすることで芝居が安易なセンチメンタリズムに流れることを避けると同時に、若い女の最後のことばを車掌に聞かせようとしたのである。それはすなわち、車掌は若い女の小さな、しかしきわめて重要な決意の証人とならねばならないということである。筆者はその考えに賛同して、すぐさま本田氏の提案を受入れた。

さらにまた、本田氏の提案は「どうせ平凡なつまらない人生でしょうが、まあ、ないよりはましでしょう」という車掌の科白を二つに分割し、後半を若い女の独白の後に置くことで強調するものでもあった。その結果、「まあ、そんな人生も、ないよりはましでしょう」という車掌の科白は、皮肉でシニカルであるからこそ一層、若い女の小さな決意に賛同し後押しするものとして際立つことになったと言えるだろう。

ラストの若い女の科白と車掌の科白は別の点でも議論の対象となった。まず問題となったのは、初稿にあった「銀河鉄道株式会社」ということばである。演出の増田杏菜氏と川畑行史氏は「株式会社」ということばは「俗世間を感じさせ、ロマンティックではない」という理由から削除することを主張した。筆者は最終的に演出の判断に従い削除を了承したが、個人的にはこの芝居はいかなる意味でも「ロマンティック」なものではなく、むしろ死出の旅さえ俗世間の資本主義的論理に支配されているということが重要であったと考えている。

それ以上に重要だったのは、「唐揚げを食べて口のまわりがべたべたになるあの感触、おつりにギザギザの入った十円玉をもらったときのあの小さな喜び」という若い女の科白をめぐる議論である。もともとは若い女役の西川恵美氏がこの科白にどのような感情を込めればいいのかかわからず、うまく科白が言えないと言ったところから生じた議論であったが、その中で演出の増田氏はこの科白では観客の共感がえられないとして「おなががいっぱいになったときの喜び」や「ただいまと言って、おかえりと返事がかえってきたときの喜び」と差し替えることを提案したのである。

しかし、唐揚げや十円玉にまつわる喜びが万人に共感されるものではないことは、筆者にとっていわば織り込み済みであり、むしろそうであるからこそ書いたものであった。筆者は次の4点に留意してこの箇所を書いたつもりである。

- 1) 若い女の「小さな幸せ」は誰もが一度は経験したことではなれない。
- 2) しかし同時に、他人にとってはなぜそれが幸せなのか疑問が湧くような

本当に「小さな」ものでなければならない。

3) 精神的なものは避け、物理的・肉体的なものでなければならない。

4) 話は具体的であることが望ましい。

唐揚げを出したのは、その直前の「夕暮れに風に吹かれて胸がきゅっとなるあの感じ」がいささか情動的・感傷的であり抽象的でもあるので、それを緩和するために具体的かつ日常的なものが欲しかったからである。その意味では唐揚げをミートスパゲティに変えても成り立つはずだ。しかし、「おなががいっぱいになったときの喜び」では意味が変わってしまう。それは誰もが了解する万人にとっての喜びだからである。

「口のまわりがべたべたになるのがなぜ幸せなのか」という疑問も湧いて当然だが、むしろそれがねらいであり、他の人にとっては幸せでもなんでもないことが、若い女にとってはなによりも貴重だということを筆者は表現したかった。ギザギザの入った十円玉についてもそれは同じで、筆者自身はそういう十円玉が財布の中にあっても全く嬉しくはない。しかし、それだけにある人にとっては嬉しくもなんともないことが、別の人にとってはこのうえなく大切であることを示すものとして適切だと考えたのである。

筆者にとっては、万人が共有する「大きな幸せ」と本人だけがもつ「小さな幸せ」を区別することが重要だった。若い女は人生のすばらしさに目覚めて現世に帰るのではない。彼女は自分の人生が平凡でつまらないものであること——どうあがいても、それ以外のものではありませんこと——を知っている。だが、それでもいいと了解したうえで現世に帰るのである。その点を変えてしまっただけではこの芝居の意味は失われてしまうであろう。

議論は平行線を辿ったまま続き、最終的には本田氏のアドバイスによって台本通り上演することになったが、このような形で作者・演出家・役者全員がこの芝居のもつ意味についてあらためて考える機会をもてたことは、ある意味で幸いだったと言えよう。

演出上最もむずかしかったのは、ラスト近くで乗客たちが若い女を追いつめる場面である。ことばだけでは「もうやめて」と叫ぶほど追いつめられないの

である。さまざまな試行錯誤の後、本田氏の提案に従って、中年の男が「そうとも。あとはあんたしかいない」と言いながら若い女の腕をとり舞台中央前面に突き飛ばし、倒れた彼女は他の乗客たちに半円状に取り囲まれ、小突かれたり引きずられたりモデルガン突きつけられたりしながら、じりじりと下手に後退していくという動きをつけることにした。また、演出の川畑行史氏の提案により初稿の科白を若干修正し、「今朝?」、「そういうことではなくて」、「つまらない人生」、「それこそ最大の不幸だね」という4つの科白は全員で言うことにした。

この箇所に関する本田氏の解釈はきわめてユニークで興味深いものがあった。本田氏によれば、乗客たちが若い女を追いつめるのは、彼女を現世に帰らせたいからなのである。乗客たちは若い女が自分たちと違うこと、彼女は現世に帰るべき人間であることを知っており、冷酷な態度をとるのは彼女に生きるものの意味を気づかせたいからである。だからこそ、列車が終点についたとき、自分にとって大切なもの——肉まんやビー玉や婚約指輪やモデルガン⁽¹³⁾——を彼女に託していくのだというのが、本田氏の解釈であった。

恥ずかしながら筆者はそのようなことは一切考えずこの台本を書いた。だが、本田氏の解釈を聞いてはたと膝を打った。筆者は日頃フランス文学の教師として学生に「文学作品というものは書かれた瞬間からひとり歩きをするものだ。作者の意図は必ずしも重要ではない。重要なのは読者がそこに何を読み取れるかである」と言い、「作品の意図や意味を読むだけでは文学研究とは言えない。作者が意図した以外のこと、作者が意図した以上のことを作品は語るものである。それを読むのが文学研究だ」と言い続けている。筆者の書いた台本

(13) 唯一の例外は中年の男である。食べさしのバナナは中年の男にとって「大切なもの」ではない。中年の男はきっかけをつくる人物であり、ただたんに何も考えず馬鹿なことをしているだけだが、乗客の身の上話にせよ、若い女への置き土産にせよ、きっかけを与えるのはつねに彼である。その意味では物語の糸を操る人物であると言えよう。「さあ、それじゃあ次いこうか」と司会者めいた科白を言うのはそのせいであり、若い女を追いつめる場面でひと言しか喋らないのも同じ理由からだ。きっかけさえ与えてしまえば、彼の役目は終わるのである。

はとても「文学作品」と呼べるものではないが、それでも作者の意図を正確に読みとったうえで、そこに作者が意図した以上のことを付け加えた本田氏の慧眼に感服すると同時に、芝居を上演するということは演出家・役者それぞれが台本と向き合い、文学研究者が作品に対してするのと同じことを台本に対してすることだと痛感させられた。

最後に作者の立場からひと言付け加えておこう。この芝居に登場する乗客たちは幸福＝平凡、不幸＝非凡という図式を描いているし、この芝居自体そういう図式で動いている。しかし、仕事をやめて家族にあわせる顔がない中年サラリーマンにせよ、家族に交際を反対されて駆け落ちをしたカップルにせよ、都会に出てきて悪い男に騙された女にせよ、DVを受けてアルコール依存症になってしまった主婦にせよ、誰からも理解してもらえないオタクのひきこもりにせよ、乗客たちの不幸はいやというほど平凡で、どこにでもある不幸である。つまり、幸福が平凡であるのと同じく、不幸もまた平凡であること、人間の生というものは幸福であれ不幸であれどこまでいっても悲しいほど平凡でつまらないものであることをこの戯曲はあらわしているのだ。だから、若い女が最後に平凡な人生でもいいから———というか、仕方がない、それしかないのだから———生きていようと決意することは、彼女ひとりの問題ではなく、おおげさに言えば人間が平凡さという自らの運命を受入れる瞬間をあらわしているというのが、筆者の当初の意図であった。

この話を本田氏にしたところ、氏はいたく納得して、「そこまで表現できるかどうかはわからないが、できたらすごい。でも表現する必要はないかもしれない。ただ、観客にそれを感じてもらえるような風を吹かすことができればいい」と答えた。果たしてそのような「風」を吹かすことができたかどうかは、筆者にはわからない。われわれは表現者として非力ながらできるだけのことをした。それをどう受け取るか———そこから先は観客の側の問題だからである。

以上、「銀河鉄道じゃない夜」がいかにか執筆され、上演されたかについて記した。最初に書いたように、このような記録にどのような普遍性、どのような

学術的価値があるかは疑問であると言わざるをえないし、本職の劇作家でもない筆者が自作の解説をするなどおこがましいと言われればひと言もない。しかし、少なくとも芝居というものが「集団芸術」であり、作者・演出家・役者などさまざまな人間の個性や人生観・世界観のぶつかりあいから生まれるものであることは理解していただけたのではないだろうか。それは長年フランスの小説と戯曲を研究してきた筆者にとっても新しい——そして貴重な——発見であった。

最後になったが、このような貴重な体験をさせてくださったピッコロ演劇学校の方々、演劇学校事務局の小梶さん、尾西さん、「銀河鉄道じゃない夜」を上演したチームのメンバー、ともに **Piccolo Passo** および卒業公演に出演した本科の仲間たち、上演指導助手をつとめてくださった広瀬綾子さん、そして誰よりわれわれ本科の主任講師であり、拙論に名前を出すことを快く承諾してくださった本田千恵子さんに心からの敬意と感謝を送りたい。

——文学部教授——